

# 県中教研

## 特別支援教育部会だより

第 34 号

発行日 平成31年3月  
発行所 富山市千歳町1-5-1  
富山県中学校教育研究会  
編集責任者 杉本 和博  
題 字 金山 泰仁 先生

### 「自己有用感」を育む授業づくり

指導主事 大村 吉永

特別な支援を必要とする生徒が、進んで社会参加できるための指導はどうあればよいか。これは、研究主題に取り上げられているテーマであり、特別支援教育に携わる教師が、9か年のゴールの姿として教育活動に取り組む大切な視点である。

数多く参観させていただいた授業の中で心に残った実践を紹介したい。自・情級の自立活動の授業である。3年生の生徒が高校見学やオープンハイスクールに参加した体験を交えて、将来の夢や卒業まで努力していきたいことを発表していた。自分の言葉で懸命に語る姿も素晴らしかったが、さらに心を打たれたのは、その後のやりとりである。1・2年生の生徒は、自分の身に置き換えて、次々と質問をし、発表者は、相手の立場になって丁寧に答えていた。普段は進んで思いを口にするのでできない1・2年生の生徒が、教えてもらった嬉しさを自ら表現していた。そして、その言葉を聞いた3年生の生徒は、後輩の役に立てたという成就感、達成感に満ちあふれた喜びでいっぱいの笑顔を見せた。

本授業のねらいは、話し合い活動を通しての「コミュニケーション能力の育成」であったが、教師の真の願いはさらにその向こうまで見据えていた。それは「自己有用感を育むこと」である。授業では、学級を巣立っていった先輩のインタビュー映像を用意するなど、多くの支援が準備されていた。人との関わりを通して自己有用感を育もうとしていることが伝わってきた授業であった。

本授業をはじめ、特別支援学級では、どの先生も一人一人をよく見つめ、その成長を願って労を惜しまず支援を工夫しておられた。そんな先生の尊い姿こそが、生徒にとって社会参加に向かうよきモデルとなっているのは間違いのないところであろう。

(西部教育事務所)

### 進んで社会参加できる生徒の育成

部長 杉本 和博

今年度は、「特別な支援を必要とする生徒が個性や能力を最大限に発揮し、進んで社会参加できるための指導はどうあればよいか」という研究主題に、「生徒が成就感や達成感を味わえる学習過程の工夫」という副題を設定し研究を進めてきた。研究主題の解明にあたり、第62回研究大会では、「生徒が興味をもって主体的に取り組み、成就感や達成感を味わうことができるような学習過程の工夫」を「場の設定」という視点から捉え、東西両地区で授業を行った。

東部地区では、富山市立南部中学校1・3年生の社会科・地理的分野の授業を公開した。EUの利点や問題点について考えるこの学習では、寸劇を取り入れ、生徒が各国の立場で発言する「場の設定」を行った。参観者からは、この「場の設定」により生徒一人一人が役割を担うこととなり、それらに取り組むことで達成感が感じられていたという感想が寄せられた。また、西部地区では、砺波市立庄川中学校2・3年生の生活単元学習の授業を公開した。これまでに作業してきた畑の思い出を残すため、PCを使ったアルバム制作に取り組んだこの学習では、二人で一台のPCを共有して操作を行う「場の設定」を行った。この授業でも参観者から、「場の設定」により生徒同士が交流する機会が自然に作られ、互いが得意分野を生かし合うことで成果が見られたと感想が寄せられた。寸劇を取り入れたり、共有してPCを利用したりする「場の設定」は、生徒相互の関わり合いを生み出し強化させ、結果としてそれぞれの生徒が「活躍できる場」となり、生徒は成就感や達成感を味わえたようである。

特別支援部会に関しては、環境の変化に過敏な生徒の授業観察をどう行うか、それ以前に、そのような生徒を残し担任が学校を離れることが「是」なのかといった意見が挙がったが、様々な手立てを講じて「場の設定」が行われた二つの授業から学ぶことは多かった。

(富・大沢野中)

# 第62回 富山県中学校教育課程研究大会

東部地区（富山市立南部中学校） 平成30年10月10日（水）

東部地区の研究授業と部会協議が富山市立南部中学校で行われた。

研究授業は、知的障害特別支援学級（1年生男子2名、女子2名、3年生女子2名在籍）で、白髭克之教諭による社会科の授業が公開された。授業公開に際しては、生徒の負担軽減のため、事前に録画しておいた授業映像を視聴する形態が採用された。

本時のねらいは、単元「世界の諸地域～ヨーロッパの国々」において「寸劇を通してEUの長所や短所を知り、多様な見方・考え方に気付くこと」であった。生徒は中学校の教科書や地図帳を使って学習していた。寸劇では「買い物編」「労働編」「EUの決めたこと」について、それぞれが自分の役割を演じていた。生徒は感情を込めて役になりきってセリフを言ったり、セリフを自分の知識として授業に生かしたりして、意欲的に取り組んでいた。また、白髭教諭が写真や資料を提示しながら、一人一人の生徒が興味をもっていることについて問いかける場面では、「シャネルのバッグ」や「BMWの車」、「ピザ」等の言葉を通して温かいやりとりが見られ、日頃から生徒との信頼関係が築かれていることが伝わってきた。

部会協議①では研究主題や本時の視点を中心に協議が行われた。寸劇や写真の資料、教師と生徒のやりとりが、生徒の集中力を高め、EUについての理解を深めることに役立っていたと評価された。また、ICTを活用することで視覚と聴覚の面から刺激を与えることができることも分かった。「生徒が自ら挙手して発表する機会を作ること」や「寸劇の後に、すぐ振り返りをするので、より効果が上がったのではないか」などの意見も出された。

豊田真一指導主事からは、

- ・ 教室の掲示物から、これまでの個人への指導の様子が伝わってきた。
- ・ 生徒一人一人の発言や反応の中に本時のねらいに迫るものがあった。
- ・ 生徒が興味をもっていることを取り上げ、生徒自身が自分のものと考えられる投げかけをすることが大切で、調べる、まとめる、発表するなど、生徒一人一人に役割を与えることで成就感や満足感が得られる。
- ・ 寸劇を子供の手で作らせてみてもよい。
- ・ 寸劇の振り返りをするので、生徒同士が伝え合い協力し合うことができる。
- ・ 授業のゴールを明確にすることが大切である。本時であれば、大きな白地図を準備して、個人が調べたことをそれに貼るなどしてまとめていく。視覚に訴えることで達成感を感じることができる。

などの評価、助言をいただいた。

特別支援学級において、自立活動を取り入れること、通級による指導では自立活動を行うこと、特別支援学級と通級の生徒については、個別の教育支援計画と個別の教育指導計画を作成し、効果的に活用することについても指導・助言をいただいた。 寺崎真由美（黒・高志野中）



# 第62回 富山県中学校教育課程研究大会

西部地区（砺波市立庄川中学校）

平成30年10月10日（水）

砺波市立庄川中学校において、西部地区の研究授業、部会協議が行われた。

研究授業は、砺波市立庄川中学校の知的障害学級（2年生1名、3年生1名在籍）で、日光勝俊教諭が生活単元学習の授業を行った。「わかあゆ畑の思い出を残そう」という題材で、4月から取り組んできた畑での作業学習の記録を2人の生徒がそれぞれコンピュータを使ってまとめる様子を公開した。

生徒自身が事前に書いた感想をもとに文字を入力したり、写真を選んで貼り付けたりするなど、比較的簡単な操作でアルバムの1ページを作るという活動であった。本時の授業では1台のコンピュータを2人の生徒が交代で使うことで、生徒同士の交流を図った。最初は得意な生徒から苦手な生徒へ「違うよ」等否定的な言葉がけがみられた。しかし、教師の「協力しようか」「一緒にやろう」といった温かい言葉がけや雰囲気づくりがあったことで、「〇〇したらいいよ」といった言葉がけに変わっていき、得意な生徒が苦手な生徒へ教えながら作業を進めるという場面もみられた。

本時の授業は、参加者が会場で直接参観した。生徒は大変緊張していたが、午前中から会場づくりをしたりして、会場に慣れさせようという工夫がされた。また、生徒が使っているコンピュータの画面はスクリーンに映し出され、参観者が生徒の活動を見やすくする工夫がされた。

グループ協議①では研究主題や本時の視点を踏まえて、教師の言葉がけや雰囲気づくりが生徒同士の交流を深めることにつながったかなどについてグループ協議を行った。

グループ協議①からは、「4月の畑作りから計画的に学習を進めたことで生徒は達成感を得られ



たのではないか」「パソコン操作が苦手な生徒には吹き出しの形や文字の色のサンプルを示すことで、自分の思いをもって形や色を選べたのではないか」等の意見が出された。

部会協議②では、協議題「個別の支援計画及び個別の指導計画に基づいた進路指導はどうあればよいか」に基づき、グループ討議の形式で日頃の実践や悩みなどについて意見交換を行った。生徒の実態把握、保護者との連携、進路先の学校の情報共有等をしっかり行い、進路指導につなげる必要があるとの共通認識をもった。

大村指導主事からは、

- ・ 作業学習から教科横断的に発展した授業であり、カリキュラムマネジメントにつながる実践であった。
- ・ 授業の中で生徒がゴールを意識して取り組めるようにする必要性があった。生徒同士の関わりをより深くするための手順の示し方を工夫することが重要であった。
- ・ 教育支援計画について保護者と本人の合意形成をはかるものであるため丁寧に作成する必要がある。

との助言をいただいた。

生徒の個性や能力に応じた指導内容を、長期的に計画していくことの重要性を改めて実感した実践であった。 寺西 良太（氷・十三中）

# これからの特別支援教育を考える新・道徳教育と自立活動

(第62回東部地区大会での講演要旨)

富山大学人間発達科学部 小林 真 教授

## 1 特別支援学級の教育課程について

中学校学習指導要領第1章総則には、

ア 「(中略) 特別支援学校小学部・中学部学習指導要領第7章に示す自立活動を取り入れる」こと。

イ 「(中略) 各教科の目標や内容を下学年の教科の目標に替えたり、各教科を、知的障害者である生徒に対する教育を行う特別支援学校の各教科に替えたりする」となっている。教育課程を編成するときは生徒の実態に合わせて設定することが必要である。

## 2 教育支援計画、個別の指導計画について

教育支援計画や個別の指導計画は家庭や地域や専門機関と連携することが必要である。その際に、今後の生徒の3～5年間を想定しながらどんな能力を身に付けさせたいかを考えたり、高校や高等部を卒業した後にどのような進路に進み、どのような生活を送るのかをイメージしたりして、計画を立てることが求められる。

## 3 道徳教育について

道徳教育で生徒に指導する内容をまとめて「非認知的能力」と呼んでいる。これはいわゆる知識よりも根源的な「生きる力」というものである。これは週1回の道徳の時間を行うことのみで身に付くものではない。特に自閉的傾向や知的障害のある生徒の場合は、その特性のため、できるときとできないときの差が激しく、短期間ではなかなか身に付かないように思えるが、長期的な視点で見ると徐々に成長している。

「非認知的能力」の中でも重要なものが「よりよく生きる喜び」とほぼ同じ言葉で使われる

「自己有用感」である。「ありがとう」と声をかけられることで、褒められたり認められたりしていると認識し、生徒の自信につながる。そしてリーダーとしての責任感や役割意識が芽生え、社会参画への意欲にもつながる。一方、このような経験が乏しい場合は「自己有用感」や「自尊感情」が低下する状態が見られることがある。この場合は、学校だけでなく各種の専門機関と協力して支援を行うことが必要である。

## 4 自立活動について

適切な項目を選び、単独で行うというよりも、いくつかの項目を関連付けて実施することが自立活動として効果的である。自立活動は、道徳教育と密接に関わっている。道徳科の時間に「こうあるべきだ。」という理念的なものを学ぶ。それを具体化して行動やスキルのレベルで学ぶのが、自立活動の時間になる。しかしながら、それだけで定着することは難しいため、日々の学校生活の中で実践しながら定着を図るというような、有機的な関連付けが求められる。

山岸雄太郎(中・舟橋中)

